

住宅生産環境が大きく変化 未来を見据えた金山住宅を



DIK設計室代表
東京藝術大学名誉教授
片山 和俊 氏

平成24年度から金山町住宅建築コンクール審査委員長。また、長年にわたり金山町街並み景観審議会専門委員として、金山の景観づくりに尽力されている。



平成30年12月14日に開かれた第41回金山町住宅建築コンクール審査会。アドバイザーを含めた10名の審査員により審査が行われた。

毎年同じようなことを書いています。今年も書かざるを得ない。

金山町街並み景観づくり100年運動は、この「住宅建築コンクール」と「風景と調和する街並み景観条例」を車の両輪として組み立てられている。ここまで続けて来られたのも、全国から高い評価を得てきているのも、この両輪が回ってきたお蔭である。

けれども町のこの取り組みは順調にきたわけではない。世の中の趨勢は難しい方向へ進み、その向かい風を受けながらここまで来ている。向かい風の1つが日本全国で起きている人口減少。東京のような大都市圏で超高層マンションが建ち続けているのは不思議だが、各地で空き家が増えている。金山町での新築着工軒数が減るのが当たり前の状況下にある。

加えて住宅の作り方にも向かい風が吹いてきている。思い出すのは構造基準の見直しで、雪国で便利にしていた高基礎が出来なくなり、階として、しかも木造とRC造の混構造としての解析が必要になったことだ。構造的に正しいことに違いないが、随分窮屈になりRC造の上に木造を載せる建て方が減ってしまった。それが2つ目。

そして3つ目の向かい風が、省エネ

的な側面から住宅の性能向上が叫ばれ、断熱強化等の必要から外壁の外断熱構法が進んだこと。金山住宅の真壁造（内断熱）による外壁は、外装（外断熱）へと変わった。真壁造の外壁を構成していた構造的な柱梁が隠れ、書割りの柱梁になっている。外壁から金山杉を使う必然性がなくなってしまう。開口部も小さくなって制作建具が姿を消し、既製品のアルミサッシと複層ガラスの使用が当たり前になっている。さらに国は2020年までにネット・ゼロ・エネルギーハウス（※ZEH）の普及を目指している。

このような風を受けて住宅の外観が、屋根以外の部分で金山住宅とは異なる作り方に変化したことに加えて、最近目立つのは住宅内部の変わり方だ。作る材料や設備の既製品化、部品化が進み、旧来の手作りの仕事の内装ではなく、メーカーのカタログからのアッセンブリーで作られている。ユニットバスやシステムキッチンなどは勿論、床材も階段もドアもなにもかも既製品である。しかも夫々が木の家に合う表情を備えている。

つまり極端に言えば、金山の地場産材がなくても木らしい家ができる。踏み込んで言えば、どこの工務店に頼んでも既製品に頼れば同じことになる。

そして頼れば頼るほど工事費のかなりの部分がメーカーや代理店に流れてしまう。金山町内で留保した折角の資金が町内を回らずに、町外へ出て行ってしまふのだ。目指す金山住宅の前に、既製品や部品化の風が吹いている。

長い間、外部のメーカー住宅の進出に危機感を抱き、景観条例が歯止めになることを期待してきたが、今や住宅建設は内外部からジワジワと進んで、総体として外部資本に席巻されていると言っているだろうか。従ってこうした住宅生産環境の中で、住宅建築コンクールもある程度の変質を容認せざるを得ない。が、その一方でこの一線は譲

れないという見識と方法を持たないと、金山杉による金山大工が生み出してきた本来の金山住宅の特徴が消え失せてしまふ危機が迫っているように思われる。それが最近の住宅建築コンクールの審査を通じて感じる状況である。

今回の応募は2軒で、共に若い家族によるものである。生き生きと暮していく空間として、審査員の多くから好評をもって迎えられた。

阿部家はコンパクトにまとめられた平面で、玄関から居間台所と回れる便利で合理的な構成をもち、外観も切妻屋根ですっきりまとめられていた。が、内外に金山住宅らしき、特に内

部にもう少し効果的に金山杉材を用いて欲しかったという審査委員の評から、商工会支部長奨励賞を贈ることになった。

庄司邸は1階に寝室群をまとめることにより、2階に居間・オープンキッチン、小さな座敷、浴室によるオープンな空間が生み出されていた。若い家族の暮らしが展開される様子で金山杉が用いられていることから、特別賞を贈ろうという評価になった。

更に住宅ではないが、参考として見て廻った内町の英伸製作所作業場棟が審査会で話題になった。大堰公園に面する立地条件から、L字型に回した下屋と金山杉材を張った外観への賛

辞が多く、非住宅もコンクールの対象とした方がよいのではないかという意見が出された。住宅コンクールの対象範囲を広げることが、今後の検討課題となった。いずれにしても前述した状況の中で、今回若い世代の方々が金山住宅づくりにトライしてくれたことに対する感謝の意を、審査委員一同に代わってお伝えしたい。加えて、前述した状況に対して指を加えて見ているだけでなく、金山杉を用いた金山大工によるZEHを視野に入れた金山住宅をどう作り出すか、作り手と専門家が一致協力して取り組む時ではないかという思いを一層強くした審査会であった。



▲商工会支部長奨励賞を受賞した阿部家（下野明）。人の動線が考えられている間取りが評価。特に子どものことを考えた構造に好感が持っていると評された



▲庄司家（七日町）は特別賞を受賞。2階にリビングなどの居住スペースがあることが特徴。金山杉を使用した天井や開放的な空間が好評を得た



▲審査委員が両物件におもむき、視察。外装から内部の詳細まで金山住宅らしきが見られた

※ZEHとは… 「ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス」

「快適な室内環境」と「年間で消費する住宅のエネルギー量が正味で概ねゼロ以下」を同時に実現する住宅。経済産業省では、「2020年までにハウスメーカー等の建築する注文戸建住宅の過半数でZEHを実現すること」を目標とし、普及に向けた取組みを行っている。